

40 医療法人 信愛会
日比野病院
周年記念誌

Hibino Hospital 40th Anniversary

ご 挨 拶



令和元年、日比野病院は40周年を迎えました。

「ひとに恵まれた」

これは父弘道が晩年、私に繰り返し語っていた言葉です。

今、本人に成り代わり皆様に感謝を申し上げます。

これまで病院には86000人以上の人が患者として来院されております。

これは開院当時の安佐南区人口の半分以上にあたり、地元の皆様から多く利用いただけていると理解しております。

病気では「脳疾患」が最も多くなりますが、最近では「肺炎」などの内科疾患も増えています。これは高齢者増加を背景にしたものと捉えております。

地域の皆様には温かく支えて頂きましたことを感謝申し上げます。

40年前、広島大学病院脳神経外科助教授であった日比野弘道は当時、安佐地区には病院が少ないこと、脳卒中が専門外で治療されていることをとらえ、昭和54年、150床の日比野病院をこの地、安佐南に開設しました。開院まもなく米澤學先生、津元光雄先生、小林益樹先生、金澤潤一先生と一緒に、現在の「脳」と「救急」という形を築いてきました。

令和元年から木矢克造先生も加わり、求められる病院機能の明確化とレベルアップに邁進すべく、多方面から御指導も頂いています。広島大学病院、広島市立広島市民病院、広島市立安佐市民病院、安佐医師会、安佐南区医師会先生におかれましても、今後ともご指導をお願いしているところです。

私達、日比野病院は50周年、さらに60周年に向け、病院として安佐南の「健康町づくり」に参加貢献したいと考え、全職員一丸となって新たな気持ちで走り出しています。

理事長 日比野 純一郎

Hibino Hospital



日比野弘道先生の手により昭和54年10月に日比野病院が開院されて以来、現在まで40年の歳月が経ちました。この節目を機に、今までの病院の歩みについて、皆で記念誌を編纂しようということになりました。様々な人の話を聞いては当院の過去を紐解いていくうち、40年間における各時代で、病院を支えてきた人々の苦悩や喜びが見えてきました。当院が、沼田の地にて住民の方から信頼され存続してきたことは、職員の心に流れる恕の精神に因るものであるとの思いに辿り着きました。

今迄を振り返ってみますと、脳神経外科という専門病院のスタート以来、日比野弘道先生と仕立剛氏との名コンビを核とし、強い絆で結ばれた集団の猛進時代がありました。高齢化に伴う介護の視点が広がり始めた頃からは、ケアミックス病院として舵が切り替えられました。しかし平成15年、不意打ちともいえる日比野弘道先生の死が訪れました。病院の先行きが不透明な時期であっただけに、この世への未練には計り知れないものがあったと想像します。その混乱の中、急遽日比野誠一郎先生を理事長、小林益樹先生を院長とした船出でした。本当に荒波の航海でしんどかったと思いますが、徐々に回復期リハビリテーションを旗頭とした診療内容へ収斂されつつあります。折しも国から地域医療構想が打ち出され、かつ地域包括ケアへと時代の潮流は変化し、回復期機能の充実が指摘されているところです。また安佐南区は今後も高齢者人口が増加する地域であり、医療介護の連携体制の構築は住民の人々にとり大変重要なものとなります。これら医介連携の強化は、低経済成長期のなか、超高齢社会における自立的な生活を支えるための長期的視野に立った仕組み作りでもあります。

この記念誌の発刊に際しましては、沢山の方々からの熱き思いが寄せられました。厚く御礼申し上げます。学術業績は院内広報誌「やまびこ」に毎年収載されていますので、ここでは割愛します。当院における今までの活動記録の証とするだけでなく、新たな地域貢献を目指す礎になればと願う次第です。

院 長 木矢克造

40th Anniversary



特 別 寄 稿

日比野病院と私

広島大学名誉教授
県立広島病院名誉院長

魚住 徹

日比野弘道先生は昭和五四年十月に日比野病院を創設された。開院式典の御挨拶の中で「この沼田町伴の地は現在は狐、狸の出没する山の中ですが、やがてこの地は繁栄し日比野病院は必ずや皆様方の御役に立つことを確信しています…」と述べられた。今、その通りになっている。先見の明である。

私は昭和四九年九月一日付で広島大学医学部に脳神経外科学講座が新設されるに伴い主任教授として大阪大学から赴任し間もなく日比野先生にお会いすることとなった。八月終わりに広島に来て広島大学医学部には既に脳神経外科の歴史があり、星野 列前教授に育てられた方々が居られることが判り、直ちに医学部内に私の「三ヶ條」を記した貼紙を貼った。「患者さん第一」、「若い人の教育」、「一生懸命」の三ヶ條である。これで希望者に個別にお話を聴き共に新しい教室を創ろうと思う方々と共に働こうと考えた。この面談により幸い若い優秀な賛同者が来られて新教室が発足することが出来た。

賛同者として第二外科の助教授であった石川進先生を助教授に任じ、講師は私の直感で「この人」と思った人、日比野弘道先生を選んだ。日比野先生とは勿論これまでお会いしたこともなく何の予備知識もなかったが、偶然ある会合での立居振舞い、姿勢、表情などからこの人は私がこれまで会った人々の中でも特に優れた人であると直観した人であったからである。五三年からは助教授に昇任して頂いた。

教室発足後私の直観に誤りなく教室内外の要職で見事に成果を挙げられた。学問的には当時日本に初めて導入されたCTによる学術論文十篇以上を発表し広島医学会賞を受賞された。若い人々の教育指導も丹念に具体的に辛抱強く行なわれ、当時の先生の指導を今でも感謝している方々が多いと思う。

昭和五四年前半の或る日、部屋にお見えになって「新らしい途を拓いて見たいと思う」と云われた。脳外科領域は新しく若い領域であるから、大学と総合病院は先生が経験された上のことであるので直ちに「開業」と思った。まさにその通りであった。而し広島はもちろん、日本でも脳神経外科の専門病院は極めて少なかった当時まさに「新らしい途の開拓」である。「貴兄ならやれる。私は出来る限りの協力をします」と申し上げた。その後一気呵成に開院まで進んだ。

Hibino Hospital

その後の日比野病院の発展は周知の通りであるが、その中核となるエネルギーは先生独特の天性のエネルギーと常に人を惹きつけて止まぬ人間力によるものと思う。

平成十五年三月に先生は病に冒され天に召された。誰よりも先生自身が残念無念と思っておられたことは明らかである。天の仕打ちは情容赦もないものだとは私は天は恐ろしいと痛感した。

現理事長の御長男誠一郎先生は卒業と共に広島大学の脳神経外科学教室、お父さんが初期から力をこめて創られた教室に入られ、研鑽の上平成八年四月からお父さんの日比野病院のメンバーに入られた。

日比野病院での誠一郎先生は明朗活達、のびのびとして暖かい性質でおのずから人望の厚い脳神経外科青年医師であった。

とはいえ突如の異変で御尊父が亡くなられた平成一五年は誠一郎先生は三七才であったから、衆目の一致する所、若い感は否めなかった。

而し「お別れの会」で、誠一郎先生は堂々としておられた。一步を踏み出し来場者としっかり視線を合わせ大音声で挨拶をされた。「突然の父の死、尊敬する父、誰より誇りに思ってきたこの父に追いついて安心させたい、更に前進したい」旨をしっかりと述べられた。後継者の一步も退かぬ気迫に溢れたこの御挨拶は、来場者一同に納得と安心をもたらしたと間違いないと思う。いつもの誠一郎先生はどちらかというと優しく穏やかで笑顔で話されることが多いので、この大音声の正面切った御挨拶は殊の外強い印象をもたらしたと思う。

以来、何処へ行っても、誰と会っても、どんな情勢でも、沈着と気迫で乗り越えられたお父上の後継者として、誠一郎理事長は病院の内外で暖い雰囲気醸しつつ根気強く仕事を進めてこられた。今や立派な指導者となられたが、これからもお父上はこんな時どう考えられるだろうかを考えて、十年後、二十年後、もっと先の理想を画いて、それを実現して頂きたいと思う。

40th Anniversary

目 次

ご挨拶

理事長 日比野 誠一郎

院長 木矢 克造

特別寄稿

日比野病院と私

広島大学名誉教授 県立広島病院名誉院長 魚住 徹

お祝いの言葉

日比野病院 開設40周年に寄せて

広島県医師会会長 平松 恵一 8

日比野弘道先生を偲ぶ

広島県病院事業管理者 浅原 利正 9

日比野病院開院40周年にあたって

中国労災病院 院長（広島大学大学院医系科学研究科 脳神経外科学 前教授）栗栖 薫 10

日比野病院40周年に寄せて

安佐医師会 顧問 伊藤 仁 11

日比野病院開設40周年に寄せて

安佐医師会 会長 吉川 正哉 12

日比野病院と当院との過去・現在・未来

安芸太田病院 院長（安佐市民病院 前院長）平林 直樹 13

地域医療の「先駆者」40年

沼田町伴地区 コミュニティ推進協議会会長 川本 一之 14

沿革

院長 木矢 克造 16

施設概要

..... 18

病院の組織体制

..... 19

開院40周年を振り返って

日比野病院院長補佐 小林 益樹 20

日比野病院副院長 金澤 潤一 24

日比野病院顧問 仕立 剛 25

元看護部長 星加 ミヨノ 26

元診療技術部長 新居田 茂充 29

直近10年間の主要診療実績

..... 30

各部署紹介

..... 31

診療部

..... 32

看護部長室

..... 33

看護部（外来）

..... 34

看護部（1病棟）

..... 35

看護部（2病棟）

..... 36

看護部（3病棟）

..... 37

リハビリテーション科

..... 38

薬剤科

..... 39

放射線科

..... 40

臨床検査科

..... 41

栄養管理科

..... 42

臨床工学科

..... 43

地域連携室・患者支援相談室

..... 44

診療情報管理室

..... 45

事務部

..... 46

社会貢献活動

..... 47

写真で見る病院の歩み

..... 49

編集後記

..... 56

お祝いの言葉

日比野病院 開設40周年に寄せて

広島県医師会会長
平松 恵一



医療法人信愛会日比野病院が開設40周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げますとともに、40周年記念誌が発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

昭和54年日比野弘道先生が安佐南区の当地にて、脳神経外科の単科病院(120床)として開設されて以来、循環器科、神経内科、呼吸器内科を増設し、急性期医療はもちろん、回復期病床、療養病床を併せもつ地域の中核を担う基幹病院として地域医療のために多大な貢献をされていることに、広島県医師会を代表し、理事長日比野誠一郎先生をはじめ、関係者の皆様に心より敬意と感謝の意を表す次第であります。

病院の設立者の日比野弘道先生は私の5級先輩で、先生の潑刺としたお姿が今でも思い出されます。先生は地域に密着した脳外科専門病院として、地域住民の絶対的信頼を受けて来られました。平成3年には救急医療功労者として、県知事表彰を受賞されておられます。平成4年にはMRIの設置、病床も164床にされ、平成7年には医療法人信愛会を認可されています。平成8年には御子息日比野誠一郎先生がご就任、平成9年には老人保健施設しんあいを開設、新館の建設、ケアミックス型の病床体制をとられるなど、常に時代の先を見据えた病院経営をされて来られました。

平成15年3月弘道理事長ご逝去後、日比野誠一郎理事長、小林益樹院長の体制となった後も、新しきを求める病院の経営体制は変わらず、平成18年には回復期リハビリテーション病棟(50床)の開設、そして同年7月には病院機能評価認定証を授与、平成19年5月には日本リハビリテーション医学会研修施設に認定されるなど、病院の質的評価の改善にも努められました。

そして、女性職員の勤務環境改善の目玉ともいえる院内保育施設も開設される等、病院ホームページも素晴らしく、個人病院としてはやるべきことは全てやったと思える充実振りであり、新たに木矢克造先生を院長に迎えられました。日比野病院の今後の更なる発展を祈念しお祝いの挨拶とさせていただきます。

日比野弘道先生を偲ぶ

広島県病院事業管理者
浅原 利正



日比野病院創設40周年誠にありがとうございます。日比野病院は故日比野弘道先生が昭和54年10月に脳神経外科病院として開設され、これまで救急医療功労者県知事表彰受賞(平成3年)、日本リハビリテーション医学会研修施設に認定(平成19年)、日本脳ドック学会認定施設に認定(平成22年)、令和元年度救急医療功労者知事表彰受賞など医療の質が高く評価されて社会的評価を受けられ、地域の医療に多大なご貢献をされてこられました。日比野弘道先生は私にとって広島大学医学部野球部の先輩でもあり、私が所属しております当時の広島大学第二外科の先輩でもありました。先生は昭和36年卒業ですから昭和46年卒業の私は学生時代一緒に野球をしたことはありませんが、監督を務めていただいたことがありました。私が5年生の時、呉市広町で春の合宿中、チームメイトの後輩が朝のランニング中暴走してきた乗用車にはねられ、頭部外傷を受け当時音戸町立病院に勤務されていた脳神経外科専門の日比野先生に連絡したところすぐに来ていただき、手術の可能な労災病院に運んだことを記憶しています。後輩思いのいつも優しい日比野先生でした。

第二外科では当時医局対抗の野球の試合が毎年開かれており、日比野先生は第二外科のエースとして活躍しておられました。スリークオーターから繰り出される直球や変化球で相手チームをねじ伏せておられた様子を学生時代に審判をしながらよく記憶しています。臨床では脳動脈瘤の外科治療の専門家として、当時一般的でなかった開頭手術に積極的に取り組んでおられた様子を鮮明に記憶しています。開頭、クリッピングの操作は極めて高度の技術を要する脳外科手術で、大学でもほんの一部の先生のみがされていたと思います。私の記憶の中で、脳動脈瘤外科手術の名手で、スポーツマンで、優しく人間味あふれる人格者の先生でした。

そんな先生だからこそ平成15年、すい臓がんを罹患され大学病院に入院されましたが、私たちが先生の治療のお役に立てなかったことが悔やんでも悔やみきれません。67歳の若さでこれからというときに惜しい先輩を失いました。先生のご意思はご子息の誠一郎様が受け継がれてゆくと思います。

日比野病院の40周年を心からお祝いするとともに日比野弘道先生のご意思が何時までも皆さんの手で引き継がれてゆくことを心より願っています。

日比野病院開院40周年にあたって

中国労災病院 院長
(広島大学大学院医系科学研究科)
(脳神経外科学 前教授)
栗栖 薫



令和元年10月1日、日比野病院開院40周年記念祝賀会が、地域でお世話になっている診療機関の皆様をお招きする形で、大変立派に開催されました。広島大学脳神経外科学教室ご出身の、故日比野弘道先生が昭和54年10月に開設されました。当時広島大学医学部の学生であり、弘道先生の授業に出席し、脳神経外科を勉強させて頂いておりましたが、病院開設にあたっての夢や展望を授業の時にお話しになられたことを鮮明に覚えております。また、学生の身分でありながら、開院されたばかりの日比野病院を訪問しました。弘道先生のお父様まで挨拶に出てこられ、大変恐縮したことを覚えています。開設の紹介の新聞記事を切り抜いており学生時代のノートの裏表紙に貼っておりました。(そのような記事がなく、祝賀会の時に、木矢院長から記録に残すのでとコピーあるいは写真に撮られた様です。)いずれにしても、本当に感慨深い訪問でありました。

早いものでそれから40年。多くの大変な時期を乗り越えてこられ、時代のニーズを先取りしながら、多面的に発展されてこられました。その中で弘道先生の若すぎるご逝去という一番の悲しいことがございました。しかし、ご子息の誠一郎先生が理事長に就任され、また、多くの優秀な病院のスタッフの皆様が理事長を盛り上げ、今日までの発展を見るに至りました。

日比野病院は地域に欠かせない診療機関となっており、非常に重要な医療機関となっています。また、日本の福祉・介護を含めた医療サービスの具体的な施設を束ねられ地域密着型で活躍されておられます。数年前になりますが、台湾の台中退役軍人病院の首脳部が、その進んだ医療体制を是非見学したいと要望され、老人保健施設しんあいも含め、デイケアセンターなども見学されました。短時間で、また近い地域内に日本の福祉・保健・医療サービスの縮図を勉強できたと大変好評でした。

さらに令和に、木矢院長先生の体制になり、木矢院長先生のこれまでの県立広島病院における経験をさらに生かした病院運営が大いに期待されるところであります。今後の日比野病院の益々のご発展を祈念させて頂きまして、40周年記念の祝賀のご挨拶とさせて頂きます。

日比野病院40周年に寄せて

安佐医師会 顧問
伊藤 仁



この度は創立40周年誠にありがとうございます。

創始者の日比野弘道先生には随分かわいがっていただきました。

40年近く前は沼田ブロックに医者がほとんどおらず、安古市ブロックの一員としてブロック会に出席しておりました。その後二次会に行くことが多かったのですが、ほとんど日比野先生が誘っていただき、有名なクラブに連れて行っていただきました。その折、日比野先生は私の父稲造に随分世話になった。だから私を連れて行くんだと言っておられたことを覚えています。

その後時代が変わり、日比野誠一郎先生が理事長となられ、院長も小林益樹先生から、県病院の院長をされておりました木矢先生に交代され、老人保健施設も増築され、各種介護施設も経営されており、ますます発展の一途をたどっておられます。沼田町から伴に住所表示が戻りましたが、伴の中核病院として機能を発揮してこられました。脳神経外科を中心とした医療機関として多くの救急患者の受け皿として活躍してこられたことに大変感謝しております。

今後ますますのご発展を祈るとともに、沼田地区の開業医の中心となって引っ張っていただくようお願いする次第です。発展してきたとはいえ沼田地区はまだまだ田舎です。田舎の特徴を活かしつつ、医療的には先端技術を配信していただきたく思っております。

日比野病院の今後のますますの発展と、理事長、院長はじめ職員の皆様のご健勝を祈念しお祝いの言葉とさせていただきます。

日比野病院開設40周年に寄せて

安佐医師会会長
吉川 正哉



日比野病院開設40周年、おめでとうございます。昭和54年の開設以来、安佐地区に唯一の脳神経外科専門病院として、脳疾患の救急を積極的に受け入れていただき、地域に密着した細やかな医療を提供されておられます事に感謝しております。

開設者の故日比野弘道先生には、私が安佐医師会役員になった時から先輩役員として御指導いただき、また副会長も歴任され大変お世話になりました。ゴルフもご一緒させていただき、楽しく廻ったのも、先生との思い出の一つとなっております。今でも、日比野病院には安佐医師会の事業に積極的に参加していただいております、特に毎年行っている救急救護訓練や安佐医学会では欠かせぬ存在です。また、理事長の日比野誠一郎先生には安佐南区医師会の理事として、ご活躍いただいております。

日比野病院のある安佐南区は、広島市8区の中で人口が最も多い地区で、今も人口が増加しており若年層の多い地域ですが、高齢者人口も5万人を超え広島市で最も高齢者の多い所です。今後さらに高齢者が増えることが予想され、市町の進めている地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題と思われます。住み慣れた地域で最後まで暮らすことができるためには、医療・介護・福祉の連携が必要であり、特に高齢者増加地域においては医療面の充実が重要となります。日比野病院では、救急や急性期脳疾患に迅速に対応いただいております、老人保健施設・サービス付き高齢者住宅・訪問看護・訪問介護・通所介護の施設も備えておられます。脳疾患の外来入院治療から在宅での生活介護まで、医療を中心に一貫したサービスを提供されており、地域包括ケアを支える安佐南区の主要な病院の一つです。

今後とも、日比野病院が地域医療を支える病院としてますます発展されます事を祈念いたしまして、御祝いの言葉とさせていただきます。

日比野病院と当院との過去・現在・未来

安芸太田病院 事業管理者
(安佐市民病院 前院長)

平林 直樹



この度は開院40周年誠にありがとうございます。

昭和54年10月の日比野病院開院に遅れること約半年の昭和55年5月に当院は開院しております。その当時から大凡40年間主に脳神経疾患の患者を介して両院の良好な関係を継続してきましたが、2025年に向けた地域医療構想に基づく病床機能分化を進める過程でこの関係がより強固になってきたという印象を持っています。また2022年には当院の新築移転が控えております。

現病院から日比野病院に行くには国道54号を南下し緑井天満屋の交差点を右折後アストラムラインの下を通るルート(12.5Km この原稿を書いている時間帯(11時)で車で30分)が一般的です。この距離を患者さんに安心して転院して貰えるように情報交換や場合によっては診察・患者・家族への説明の為に定期的に通って頂いている濱先生と連携室・病棟の看護師長の皆様には頭が下がる思いをしていますし、大変心強く感じております。

地域で発生した脳血管障害の患者さんは昨年春からJUSTスコアに基づき搬送先を決めるシステムの運用が始まりました。日比野病院に受診された脳梗塞発症早期の患者を当院に搬送する新たな試み(Drip & Ship)による搬送は減るかもしれませんが、急性期治療後の回復期リハの患者数は大きく変わらないと思われます。2年後に当院があき亀山駅直結の新病院に移転した後は筒瀬を通る11.4Kmのルートが交通渋滞もなく最短・最速となりますが、市民病院との距離は広島市立大学の横を通り高速4号に乗れば10.6Km(800mの差)です。同じ市立病院機構内の2病院ですので、患者さんの都合でどちらかの病院を選んで頂ければ良いのですが、今より近くなる分、多少の付度をお願いしつつ私の寄稿文とさせていただきます。

地域医療の「先駆者」40年

沼田町伴地区
コミュニティ推進協議会会長
川本 一之



アストラムライン伴駅の東にそびえる火山。「ひやま」と呼ぶ、富士山に似た山の麓に「日比野病院」が産声をあげたのは昭和54年秋。広島市に合併して9年。広陵高等に次いで広島修道大学が総合移転、団地が造成され、人口が少しずつ増加し始めた時期でした。

辺りには水田が広がり、周囲を山に囲まれた農村の雰囲気の色濃く残していました。

その頃の我が家の夕食時の会話で思い出すのは「何でも脳外科の病院が伴に建つらしい。これからは安心じゃのー」と興奮して語る父の姿でした。父の母、つまり私の祖母は供出のための米俵づくりの作業中、その俵の上に崩れるように倒れ、1週間後、家で息を引き取りました。79才。脳卒中でした。

「もはや戦後ではない」と高度経済成長が始まったころですが、特別な治療を受けることもなく、最期を迎えざるを得なかったのが普通でした。しかし、父には「何もしてやれなかった」という母への悔いが残っていたのでしょうか。その思いが「これからは安心…」という言葉になったのだと思うのです。

その“安心”の基が日比野病院の開業。当時の最新医療が我が町に持ち込まれたのですから、住民は期待感をもって迎えました。そして、「倒れた」と言っでは、「骨が折れた」と叫んでは、家族を抱えて病院に駆け込む。そんな毎日が繰り返されての病院と地域住民との40年であったと思い起します。

ただ、既にマスコミに身を置いていた私には経営難に直面した病院を見てただけに、「この田舎に入院機能を備えた医療機関が成り立つのだろうか」と正直、首を傾げるばかりでした。

創設者の日比野弘道先生の開業5年後の一文に、「沼田町を主に安佐南区、安佐町など安佐北区、旧広島市、山県郡、高田郡、県外と広範な地域」(「二十年の歩み」)に医療圏が広がっていると記されていました。農村地域医療の重要性、「世界一の老人国家」への対応という先見性に満ちた脳外科病院の設立であったのを今更のように教えられたのです。

令和の今、高齢化の波は40年前の何倍にも大きくなって、地域に重くのしかかり、住民のボランティアだけではとても応じきれない現実には直面しています。

このタイミングで県立広島病院長から着任された木矢克造院長の「地域との一層の連携を」との言葉に私達は大きな勇気をいただきました。医療と福祉を束ねた地域の核として日比野病院の新たな時代への歩みに胸が膨らみます。

沿 革

施 設 概 要

病 院 の 組 織 体 制

開院40周年を振り返って

直近10年間の主要診療実績

院長 木矢 克造

日比野病院は広島市安佐南区の伴にあります。昔のこの地域は、大和朝廷と九州大宰府を結ぶ古代山陽道が通り、安芸の伴部(今の伴地区)という交通の要路でした。当院は武田山山系の一つである火山の麓の丘陵地に位置しており、谷合には安川が流れ、産業といえば農業が主体でした。また山々は花崗岩で覆われ風化により真砂土となるため、住宅造成には適していますが、豪雨による土砂災害の危険も孕んでいるという地勢です。2014(平成26)年の広島市土砂災害は記憶に新しいところです。一方で、安佐南区は急速に都市化したという特筆すべき点があり、当院の沿革にも深く関わってきました。

1979(昭和54)年10月1日、日比野弘道先生が広島大学医学部脳神経外科助教授を辞し、この地で脳神経外科の単科個人病院120床として開設されました。人間味あふれる強力なリーダーシップのもと、意を共にした脳神経外科医や医療スタッフが徐々に結集し、昼夜を分かたずことなく地域住民の命を守ってきました。その結果、安佐南区だけでなく旧広島市から県北に至るまで、脳神経外科病院の名が広く知れ渡ることになりました。安佐南区は、1970(昭和45)年の広島市基本計画発表を境に人口は急速に増加、1971(昭和46)年には広島市の編入合併第一号となり、広島市郊外のベッドタウンとして役割を担うようになった地域です。その結果、住宅団地の自家用車や工事用トラックで交通量は増加し、交通事故と死傷者も増えてきました。昭和50年代には県道広島豊平線・国道54号線の慢性的な交通渋滞が深刻化し、交通事故に伴う頭部外傷も頻発しました。同時に日本人の死亡原因の一位が脳出血であったことなど、脳疾患に対するニーズも高く、地域の人から頼りにされる病院として活動してきました。1991(平成3)年には救急医療功労者県知事表彰を受賞しました。同年に新館の増築工事が完工しました。翌1992(平成4)年には脳血管撮影装置やMRIを設置し、一般病床164床の許可を受けました。折しも1980年代後半からのバブル景気と重なり、広島広域公園や西風新都に大規模施設が整備され、1994(平成6)年には第12回アジア競技大会が開催されました。同時に広島新交通1号線(アストラムライン)が建設され、旧市内との交通アクセスは格段に向上しました。

1994(平成6)年には、組織として医療法人信愛会が立ち上がり、日比野クリニックが誕生(2000年廃院)しました。医療法人の理事長には日比野弘道先生が就任されました。1997(平成9)年には介護老人保健施設しんあいが法人内に開設されました。国内では高齢社会に対応するための検討が進み、2000(平成12)年に介護保険法が成立しました。これらを見据えながら、2000年新館

が完成(一般病床50床、医療療養病床50床、介護療養病床47床の計147床)し、法人内に編入されました。ケアミックス型病院としての舵が切られた時でした。脳疾患の場合は身体障害が残り要介護の人も多いという特徴があるため、時代の変化に先駆けているともいえるものでした。交通インフラとしては、2001(平成13)年広島高速4号線が開通したことで、車による旧市内との移動が容易になりました。

ところが、2003(平成15)年日比野弘道先生が志半ばで逝去されるという事態が生じました。急遽、理事長に日比野誠一郎先生、院長は小林益樹先生という体制で病院事業が引き継がれることになりました。2005(平成17)年にはNST稼働・教育施設の認定を受け、当院の栄養管理の基礎ができました。2006(平成18)年には回復期リハビリテーション病棟として医療療養病床の50床を転換し、地域密着型病院としての歩みが始まりました。同時に病院機能評価認定(ver.5)を授与、翌2007(平成19)年には日本リハビリテーション医学会研修施設の認定を受けました。女性の働き方の利便性を図るため、2009(平成21)年には院内保育施設「日比宅」、2015(平成27)年には院内学童保育施設「日比家」を開設しています。2010(平成22)年には日本脳ドック学会の認定施設となり、医療介護センター(訪問看護、居宅介護支援、訪問介護)を開設しました。2014(平成26)年には、一般病床の一部を地域包括ケア病床に変更しています。2016(平成28)年、在宅療養支援病院として在宅医療相談支援窓口を設置し、安佐南区は3病院での相談窓口が誕生しました。同時に電子カルテシステムを導入しました。2016(平成28)年には一般病床の一部を開放型病床とし、現在の病床数は146床(一般38床、地域包括ケア13床、回復期リハ53床、医療療養42床)となっています。2018(平成30)年には山陽自動車道の沼田PAスマートインターチェンジが当院に近接した位置で開通し、高速道路を介したアクセスも良くなりました。このように安佐南区は人口増加と共に交通アクセスの利便性を高め、旧市内のベッドタウンへと変貌しました。同時に高齢化に伴う高齢疾患への対応が迫っています。

2019(平成31-令和元)年からは木矢克造が院長に着任し、日本脳卒中学会一次脳卒中センターの認定、および日本病院会病院総合医育成プログラム認定を受けました。また再度となる救急医療功労者知事表彰も貰いました。第5次広島市基本計画に基づく安佐南区の活動には、区民の健康づくりの推進、適切な医療提供体制の確保、災害対応、西風新都の都市作りなどが掲げられています。脳を主とした高齢疾患に対し回復期機能をもつ病院として、地域医療構想と地域包括ケアをつなぐ医療の展開が必要となっています。

施設概要

診療科目

●脳神経外科 ●リハビリテーション科 ●循環器科 ●神経内科 ●内科 ●呼吸器内科

各種指定

●保険医療機関 ●救急指定病院 ●労災保険指定医療機関 ●N S T稼働施設認定病院
●社）日本リハビリテーション医学会研修施設 ●日本脳ドック学会認定施設
●日本脳卒中学会一次脳卒中センター認定 ●日本病院会病院総合医育成プログラム認定施設

施設基準

【基本診療料】

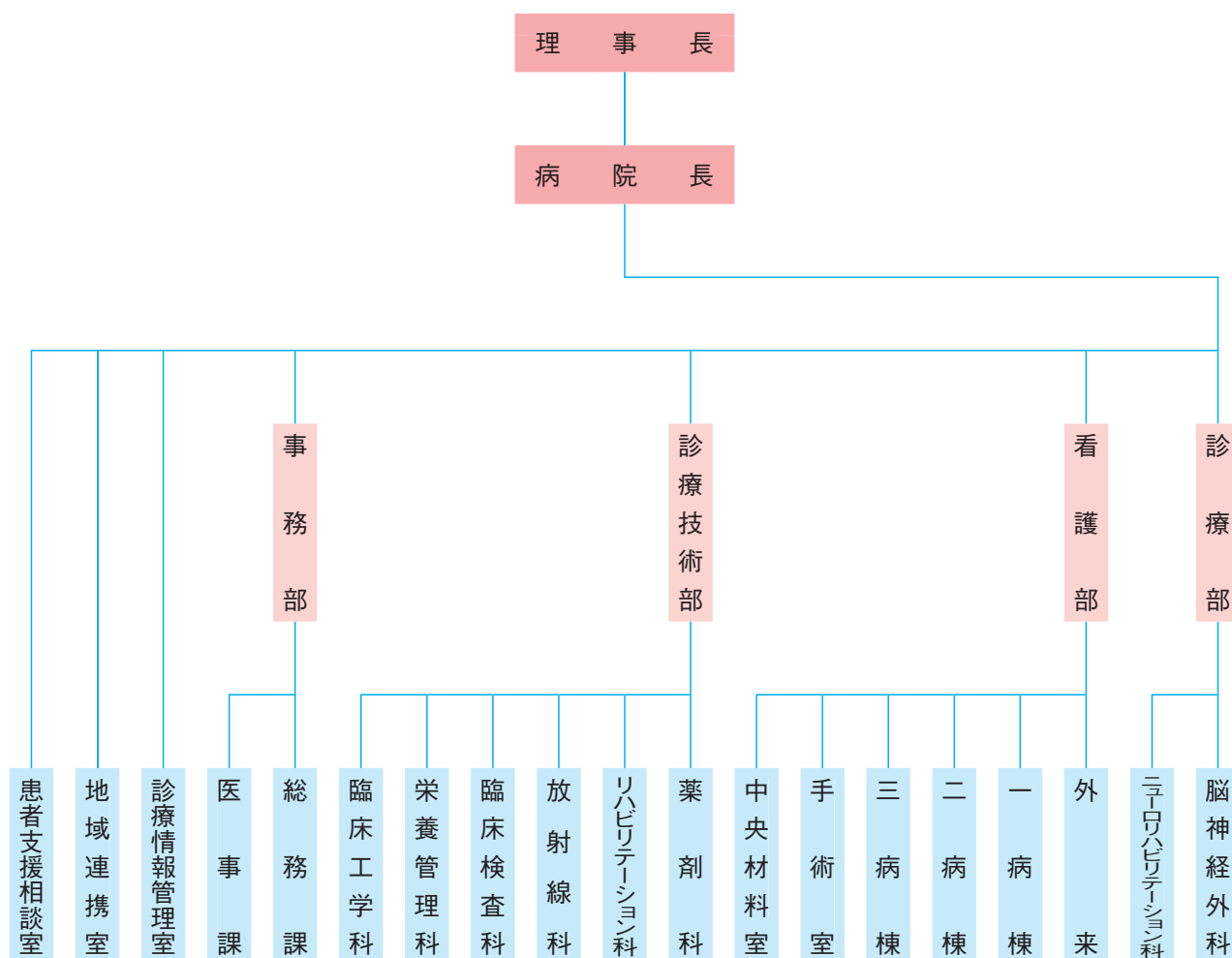
●初診料 機能強化加算 ●一般病棟入院基本料（急性期一般入院料5）
●療養病棟入院基本料1 ●療養環境加算 ●療養病棟療養環境加算1 ●救急医療管理加算
●診療録管理体制加算1 ●医師事務作業補助体制加算2 75対1
●急性期看護補助体制加算25対1 ●栄養サポートチーム加算 ●医療安全対策加算2
●感染防止対策加算2 ●患者サポート体制充実加算 ●後発医薬品使用体制加算1
●データ提出加算1 ●入退院支援加算1 ●認知症ケア加算3
●回復期リハビリテーション病棟入院料1 ●地域包括ケア入院医療管理料2

【特掲診療料】

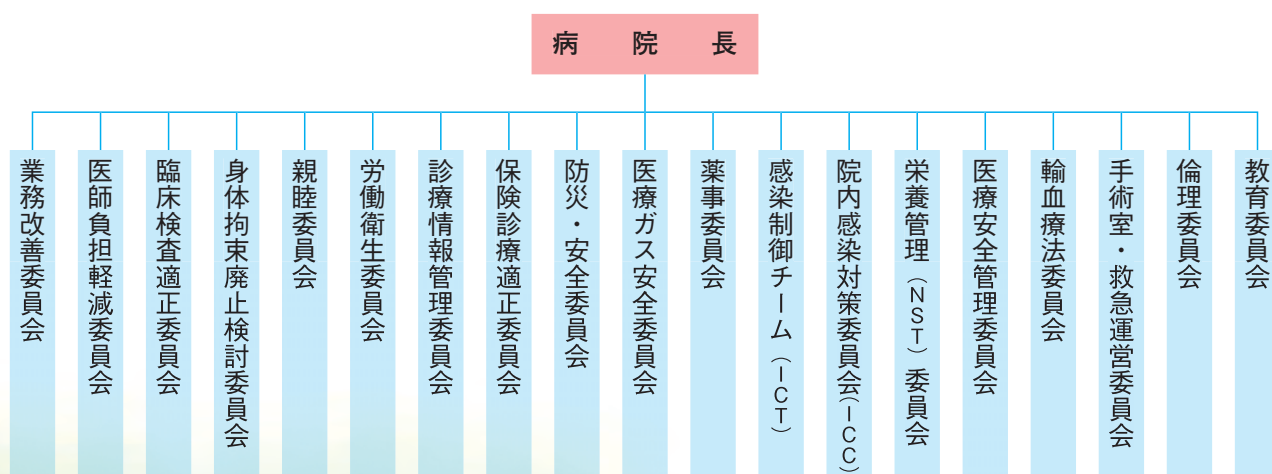
●夜間休日救急搬送医学管理料 ●外来リハビリテーション診療料 ●ニコチン依存症管理料
●薬剤管理指導料 ●開放型病院共同指導料 ●がん治療連携指導料
●診療情報提供料（Ⅰ）の地域連携診療計画加算 ●電子的診療情報評価料
●医療機器安全管理料1 ●「第14の2」の1の（3）に規定する在宅療養支援病院
●在宅時医学総合管理料及び施設入居時等医学総合管理料 ●検体検査管理加算（Ⅱ）
●神経学的検査 ●C T撮影及びMR I（1.5テスラ以上）撮影
●脳血管疾患等リハビリテーション料（Ⅰ） ●運動器リハビリテーション料（Ⅰ）
●呼吸器リハビリテーション料（Ⅰ）
●医科点数表第2章第10部手術の通則5及び6（歯科点数表第2章第9部手術の通則4を含む。）に掲げる手術
●胃瘻造設術減算規定に係わる基準 ●胃瘻造設時嚥下機能評価加算

病院の組織体制

● 組 織 図 ●



● 委員会組織図 ●



開院40周年を振り返って

日比野病院院長補佐 小林 益樹



日比野病院は昭和54年10月1日に開院され、早40年を迎えました。開院当時から勤めている人はもう、仕立剛前事務長しかいません。特にここ10年の間に開院以来一緒だった人は定年を迎えて去り、今では平均年齢41.1才と、若い世代が中心になっています。自分の勤めている病院の開院年月日は?と聞かれて答えられない職員がいるかもしれませんが、自分の大切な人の誕生日を知らない人はいないと思います。当院は開設以来40年になりますが、当院の歴史を振り返って皆さんにお話ししたいと思います。

日比野病院は昭和54年10月1日に先代の院長日比野弘道先生により、120床の脳神経外科専門病院としては広島初の民間病院として、沼田町に開設されました。日比野弘道先生は、広島大学医学部に脳神経外科の教室を創設するために、昭和49年に魚住徹教授(現日比野病院顧問)が赴任されたときに、助教授としてともに尽力された先生です。その後、広島に初めて民間の脳神経外科病院を作ろうとされ、そのときに知り合ったのが仕立剛前事務長でした。当時は総合商社の社員だったそうです。日比野弘道先生としては、小規模の病院を考えられていたそうですが、仕立前事務長に勧められて沼田町という当時は田舎のど真ん中に120床の病院を作られたそうです。

しかし、当時は経済発展期であったことや、人口増加も重なり、交通事故や脳卒中といった重症救急患者が増加していたことに加えて、まだ総合病院は市内に数少なく、夜間休日は休みのこともあり、あっという間に大忙しとなり、すぐに満床になりました。そのため、医師も不足気味になり、広島大学病院脳神経外科から応援を頼み、昭和58年には、米澤学先生、昭和60年にはわたくし小林益樹、平成元年には金澤潤一先生が赴任しました。それ以外にも第1外科、第2外科から外科医が赴任しました。DSA、MRI、手術用顕微鏡といった高度の医療機器が導入されたのもその頃です。平成8年には日比野誠一郎先生も赴任しました。さらに広大脑神経外科より常勤医が常に2~3人勤務していました。

脳神経外科ですから、手術件数も多いときには、年間80~130件程度ありました。当時は脳神経外科で手術ができる病院は広島市内に限られていましたので、休日、夜間は当然として、広島市以北、可部、戸河内、加計町や島根県からも患者さんが運ばれてきました。今でも当時の患者さんで通院している人もいます。現在では多くの総合病院が県内各地にできましたので、救急で当院に来て手術が必要な患者はそちらに転院するようになり、当院で手術を行うことは少な

くなりました。ただ、二次救急病院として、また地域の病院として24時間診療をすること、総合病院での急性期の治療が終わった患者の回復期リハビリを行っています。

話を元に戻して、当院は当初脳神経外科単科の120床の一般病床で出発しましたが、平成4年には、多くの救急患者に対応するために164床に増床されました。その後、平成4年の第2次医療法改正(新たな医療供給体制化、療養病床群の新設)、平成9年の第3次医療法改正(地域医療体制の確保、地域支援病院の創設)等の改正が進む中で、総合病院が整備されていくにつれて、100床規模の中小病院の行く末(一般病床のみでは総合病院に太刀打ちできない)が不安になってきました。そこで平成9年の病院改築時に療養病床を創設し、一般病床164床から、一般病床50床、療養病床97床、計147床のケアミックス型病院になりました。また、脳外科的疾患の病気では、リハビリが重要であることから、平成18年より回復期リハビリ病棟を作り、一般病床51床、回復期リハビリ病床49床、療養病床46床、計146床という今の原型が完成しました。

当院の歴史の中で記念すべき出来事や、転換点となった出来事についてお話しします。

一つ目は、平成7年に日本脳神経外科学会専門医訓練C項認定施設になったことでした。そのことにより、大学病院の研修先として、また連携施設としてより密接な関係を保てるようになりました。多くの手術が行われていたのもこの時期です。現在はあまり手術を行っておりませんので、認定は返上していますが、大学病院や総合病院との強い連携は今でも保たれています。

二つ目は、平成17年にNST稼働施設認定、平成18年にNST専門療法士認定教育施設に認定されたことです。これは、平成17年に三原千恵先生に当院の常勤医になっていただいたことからです。当時、呉の中国労災病院におられた先生に直接お会いして当院での勤務をお願いしたときに、快諾していただき感謝したことをよく覚えています。当時としては、まだNSTは目新しいことで、広島でも数少ない認定施設でした。その後、当院から多くのNST専門療法士が育っていきまし、この地域の先導的な立場を築いていただきました。

三つ目は、これが私にとっては一番の出来事です。平成18年に日本医療機能評価機構の認定施設に認定されたことです。当時、日本には病院が約9300施設ぐらいありましたが、認定されている病院数は2700施設ぐらいでした。この認定は、病院の順列を決めるのではなく、病院として必要な基準をすべて満たしているかどうかを審査するものです。この受審については先代の院長から依頼されていた懸案でもあり、是非取得しようとみんなで頑張りました。約2年の間、受審したいろんな病院に見学に行ったり、委員会を作り議論を積み重ね、病院も一部改築(外来部門、手術部門、入院部門)するなど改善していくうえで大変な苦労があったことを今でも覚えていま

す。その甲斐あって認定された時は人生の中でも数少ない貴重な体験になったと記憶しています。また、私としては病院長の仕事を通して、多くの方の協力、ご指導をいただき、世の中の医療・保険・介護の情勢や病院の仕組み、機能について大変多くのことを学んだことも良い経験でした。

四つ目は、平成18年に回復期リハビリ病棟を開設し、翌年に回復期リハビリテーション医学会専門医研修施設に認定されたことです。全国でも600弱の施設しかありません。濱聖司先生のおかげです。当院のリハビリの質の高さの証明でもあります。平成22年には三原千恵先生が責任者となって日本脳ドック学会認定施設にも認定されています。また、平成29年2月より柳川亜紀子先生が赴任されて、濱先生と2人体制でリハビリ部門を取り仕切っていただいています。

平成28年11月には念願の電子カルテを導入することに挑みました。これからのチーム医療を推進していくためには、是非必要であり、貴重な患者情報を災害等があってもきちんと末長く保存できるようになりました。パソコンが初めての職員が多く、軌道に乗るには1年以上の年月を要しました。大変な苦労を一緒に過ごしたと思います。ご苦労様でした。今後、日本医療機能評価機構の認定を受けるためにも有用になると思います。

最後に医局の先生についてです。

平成25年5月には忽那宗徳先生が、新進気鋭の脳神経外科医として日比野病院に新風を吹き込むべく入職されました。電子カルテ導入に際しても活躍されました。その後、高齢者の医療を行うためには、複合的な疾患が多いため、内科医を募集していたところ、平成27年4月には、斉藤慎悟先生が一般内科医として主に肺炎から消化器一般を、また、平成29年4月より、築家直樹先生が、呼吸器疾患を主体に総合診療科医として入職されました。

当院と安佐医師会との関係の中で、今でも続いていることが2つあります。

昭和58年から毎年11月に開催される安佐医学会と、9月の安佐救急救護訓練です。どちらも先代の日比野弘道先生が発案されて始められた行事です。安佐医学会の特徴は、参加する人が医師のみでなくて、医療関係者全体の職域の人が一堂に会して行う学会であることです。当時としては非常に珍しい構成でした。平成7年に始まった救急防災訓練ですが、これはその前の年に阪神・淡路大震災が起きたときに、院長が危機管理の必要性和日常の訓練の重要性を唱えられ始まりました。今では日本各地で必然的に行われていますが、当時としては、先進的な取り組みでした。毎年9月に安佐医師会、歯科医師会、薬剤師会、広島市安佐地区消防署、地域防災の人たちと行っています。

次に、当院の歴史の中で苦しみ、悲しみの出来事についてお話します。そんなに多くはありませんが、当院も必ずしも順調な時ばかりではありませんでした。

年代順にお話ししますと、平成元年に厚生省の医療監査が入ったことです。これは今でいう個別指導ですが、厚生省や県医療行政の役人、医師がきて、診療部を含めてすべての部門に監査指導が入りました。理不尽な思いもしましたが、これも何とか乗り越えて後になってみれば良い経験でした。

平成4年には、看護体制の大きな変換がありました。付き添いをなくす完全看護の基準看護体制をとることになり、そのために、多くの問題をクリアしなくてはならず、半年間、看護師長や事務長らが、夜遅くまで、夜食を作って差し入れをしながら、さながら合宿のように寝泊まりしながら作業をされていたことをお聞きしています。

しかし、一番の悲しい出来事は、創設者であった、日比野弘道先生が平成15年に急逝されたことでした。66才という若さで、まだ一番の働き盛りで、医師会や県、行政機関での活躍が期待されておりましたし、病院の船長でしたから、不安と焦燥でいっぱいだったことを覚えています。ただ育てていただいた人々が立派に育っていたことが救いでした。

こういった悲しいことやつらいことがありましたが、そのたびに多くの人に助けられ、支えていただいたことが現在につながっています。医師が不足したときには、脳神経外科や第1外科や第2外科の教室から医師の援助をしていただきました。地域の方々からも助言していただき、今もその縁は脈々とつながっております。それもこれも日比野病院が、地域の人々のために活躍しており欠かせないことを理解していただいているからなのだと思います。私としても、日比野理事長より院長職を拝命され16年務めさせていただきましたが、広島大学医学部の多くの教授や、近隣を含めて広島市内の院長を始め先生方、医師会関係の方々と交流を結び、相談させていただきましたことに感謝したいと思います。まだ書き足りないことはたくさんありますが、今までの40年間の歴史をまとめてみて、病院の危機や成長のチャンスにどのような選択をし、行動したかを共有することがそのまま価値の伝達(病院の理念)になって行くことを期待いたします。

開院40周年を振り返って

日比野病院副院長 金澤 潤一



日比野病院医局の変遷を私の目線より記すようにとの依頼があり、脳神経外科部門を中心に記していきたいと思います。

故あって私が日比野病院(当時はまだ医療法人ではなかった)に就職したのは平成元年9月です。最初に日比野弘道先生に挨拶に行った時に、院内旅行で台湾に行く話で持ちきりでした。この病院の院内旅行は海外旅行なんだと10周年記念であることを知らなかった私は、毎年かと少々期待してしまったのを思い出します。

当時の医局員は、日比野弘道院長先生を初めとして、米澤學先生、小林益樹先生、津元光雄先生でした。

当時の日比野病院周囲の医療環境は、安佐市民病院はありましたが脳神経外科はまだなく、北は千代田、島根県邑智郡などから、南は五日市の北部からも脳外科疾患患者が救急担送されてきていました。また、近隣の皆様の多くの疾患を診察させて頂いています。整形外科病院も余り多くなく、大腿骨頸部骨折を初めとする整形外科疾患も稀ならず診療し、安佐市民病院整形外科の住田先生に当院で手術をして頂いていました。整形外科手術の助手をするという貴重な経験もさせて頂きました。他科疾患に関しては私は戸惑うことも多く、米澤先生を中心に指導させて頂きました。

当初の脳神経外科疾患に関しては、手術用顕微鏡こそないものの頭部外傷や脳卒中の開頭術も行われていました。血管撮影もセルディングガー法は出来ませんでした。直接穿刺により行われていました。数年してDSA装置も導入され、MRI装置もその後間もなく稼動しています。平成6年には手術用顕微鏡もはいる、年間10例以下と数少ないながらも開頭ネッククリッピング術も行われるようになりました。その頃より広島大学医学部脳神経外科の人事として優秀な人材を派遣して頂けることとなっています。過去の手術件数を見てみると、手術件数はH16年は年間70例を記録しています。その内半数強は全身麻酔手術であり、22例は開頭術が行われています。脳動脈瘤ネッククリッピング術は8例でした。その後も広島大学病院脳神経外科血管内手術専門医の力も借り、少ないながらも血管内手術が行われています。その後徐々に開頭術が減少していったことは、ひとえに私の不徳の致すところです。

高気圧酸素治療にもしばらく携わらせて頂きました。2019年に症例数も減ったことより役割を終えたと判断し、撤去となりました。長い間症例をご紹介頂きました先生方にこの場を借りて御礼いたします。

また、多くの内科の先生、非常勤の先生の助けを得て長い年月を過ごさせて頂きました。最近では内科の先生も定着し、充実しつつあります。

あっという間に30年が経過しました。そろそろ私も余命宣告される日も近づいている気もしますが、今後日比野病院は木矢新院長先生の指導にてさらに発展していくことと思います。私も微力ながら頑張っていこうと思います。

開院40周年を振り返って

日比野病院顧問 仕立 剛



日比野弘道先生が沼田町で開院するということでは沼田町の多くの方の協力支援があってまことに順調にスタートすることが出来たと思います。特に病院土地の提供に協力いただいた國田喜積様、地域の医療に日夜ご尽力されていた伊藤内科医院の伊藤稲造様、行政機関との調整に力添えをいただいた県議会議員の神川茂紀様、連合町内会の土井夏嘉様、沼田町商工会の永井郁也様、そのほかたくさんの方々の絶大なご協力ご支援がありました。

沼田町に脳神経外科の病院が開設されるということで地域の多くの皆さんが日比野病院に期待を持っていただいたように思います。

開院当初から脳卒中の急性期や維持期の患者様はもちろん、交通事故や労働災害による外傷患者様はじめ、昼夜を問わずたくさんの方が受診されました。

日比野病院の医療提供体制はあくまでも脳外科を中心とした診療ということですが、日比野院長の人脈、人柄により広島大学脳神経外科 魚住教授様はもちろんの事、他の教室より多くの先生方に応援をいただきました。

開院と同時に集まった医療スタッフも院長の教育、指導により理念、理想を共有しながら一丸となって仕事に取り組むことが出来ました。特に看護部門には心がまえのやる気満々の精鋭がそろい、地域の人に少しでも役に立ちたいと奉仕の心が豊かな看護職員ばかりでした。開設当初の看護師の中には、後に広島県ナイチンゲール賞を受けられた戸澤トシエさんもおられ、職員全員でお祝いの会を行ったことは嬉しい思い出です。

医療は日進月歩で目ざましく進歩していますが、国の医療制度も大きく変化してその時代の社会情勢、経済情勢により毎年のように改変が行われています。

病院内部でもその改変に対応していかなければなりませんから病院で働く職員の方もお苦労が多かったと思います。しかし、病院職員の基本は奉仕の心です。いつの時代にも患者様に親切に自分のことより相手を思いやる気持ちが大切だと思います。

日比野病院が誕生してから40年、たくさんの困難や問題がありましたが、この心がまえでこれからもご苦労を続けていただき、沼田町の皆様に信頼され、愛される病院になっていただきたいと思います。

最後になりましたが、開院当初から事務職員として働かせていただき故日比野院長、眞佐子副理事長様、誠一郎理事長様には感謝の気持ちでいっぱいです。また、一緒に働いた職員の皆様にも大変お世話になり本当にありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。

開院40周年を振り返って

元看護部長 星加 ミヨノ



開院40周年誠におめでとうございます。

約14年前、日比野病院を定年退職した私に日比野病院40周年記念誌の原稿を書くようにと、吉見看護部長・住本事務部長より依頼がありました。

戸澤トシエ初代総婦長、小川美佐子二代目総婦長の両先輩を差し置いて、おこがましい限りではございますが、素直な気持ちで「分かりました」と返事をしてしまいました。

脳神経外科看護にはほぼ経験の無い看護職員体制での創設、日比野弘道院長、仕立事務長、戸澤総婦長には全てに於いて教育・指導をしていただき、当初のご苦労は並大抵ではなかった事は言うまでもありません。

弘道先生は医聖ガレンの言葉「信頼と愛情」を座右の銘とし、脳外科を中心とした地域の中堅病院として、スタッフ全員が同じ方向に向かって切磋琢磨することを常に求められました。ひたすら邁進する事が出来たのは、仕事以外での院内行事を、弘道先生自らが計画・実施・参加された事が大きな要因になっていると思います。(当初は委員会など何も存在していなかった)

例えば、子育て中の職員の子供を呼んで、親の働く姿をみせる職場見学会・クリスマス会、毎月はじめの朝礼、院内看護研修会(必ず弘道先生が厳しいアドバイザーとして参加)、安佐医学会への出題(研究内容・発表原稿の厳しいチェックと追求・学会後の慰労会)、職員旅行、日比野病院特有の盛り上がり忘年会などなど、あらゆる行事に病院長以下職員全員で取り組んだ事が、一致団結の精神と信頼関係が培われたように思います。

「給料を貰うためだけに来ている人は明日からもう来ていただかなくて結構です」ある年の1月1日朝礼の院長訓示です。今の時代では到底考えられないような強引な牽引力はとても魅力的でした。

平成2年1月より小川総婦長体制でのスタートとなりました。その頃より老人保健法の改正が始まり、医療の世界に大きな変革が矢継ぎ早に押し寄せてきましたが、日比野弘道院長と仕立事務長が車の両輪のごとく業務の大きな見直し計画を提案されました。「病棟における看護婦等の配置の評価」すなわち基準看護の導入だったのです。

脳外科病院特有の運動機能障害に伴う、食事介助・おむつ交換・移動の介助など付き添いに委ねている部分が多々ありました。その全てを看護婦と看護助手(ヘルパー)で取り組むという、本

来看護の有るべき姿を求めての大改革だったのです。ちなみに当初は 入院患者の半数程度に付き添いが付いていました。

小川総婦長を中心に何度も協議を重ね細かな計画に沿って、全ての付き添いを廃止する事ができたのです。言葉で言い表せば簡単そうですが、現場で働く一人ひとりの仕事量は膨大でした。逃げ出す人も無く「やる気」を皆が発揮し、5ヵ月後、基準看護特I類を取得する事ができました。

その後病院は増改築を進めながらソフト面・ハード面の見直しを行い、忙しい中であっても毎日の業務は遣り甲斐すら感じ、平成12年4月、遂に新館が完成し、病院は順調にケアミックス型病院としての姿が整って来ました。

その年の12月頃より病院機能評価に向けての話し合いが開始され始めた矢先、平成13年12月末で小川総婦長退職。平成14年2月から総婦長という身に余る大役を仰せつかったのです。(身の程知らず)

弘道先生が厳しい顔をして、「四分六の法則という言葉をしっとるか?」勿論「知りません」と答えました。「スタッフの4割は何とか付いてきてくれるかも知れないが、6割の人はそうはいかない、更に6割の内の3割は真っ向から背を向ける人だと思いなさい」心して業務に取り組むよう伝えられました。私は青ざめながらも日比野弘道院長先生が必ず助けてくださると信じていました。

ところがそれから半年後、平成14年8月8日、膵臓癌手術のため日比野弘道院長先生は広島大病院へ入院。何という衝撃でしょう!手術の当日病院業務を終え森婦長と二人で広島大病院へ向かいました。途中、白神神社に立ち寄り、弘道院長先生の手術が無事終わる事を祈りながら小石を積み上げ、お百度参りをしました。

強い根性で病魔と闘い、必ずや元気な姿で復帰していただけるものと深く信じておりました。

しかし、平成15年3月5日、私たちを残して旅立たれるという悲しい出来事が起きてしまったのです。悲しみは胸の奥にしまい込み、迫り来る課題「病院機能評価」の受審に取り組まなければならなかったのです。

3月14日には小林先生が院長に就任されました。弘道先生の意志を引き継ぎ小林院長指示の下、認定に必要な膨大な項目について見直し・改善・文章化の作業を全職員で行ったのです。2年と半年はあっという間に過ぎてしまいましたが、その間、看護師スタッフから重箱一杯の手作り弁当が頻繁に届いたり、問屋から直送?のインスタントラーメンの大箱を送ってくださる方もありました。遅くまで残って作業中の森婦長やりハビリの新居田先生、助金先生に声をかけ空腹を満たして深夜近くまで頑張ったこともいい思い出です。勿論家庭の事はそっちのけでしたが、文句も

言わず協力をしてくれた家族にも感謝しています。

平成17年12月8日・9日と2日間に亘り病院機能評価(バージョン5)の審査を緊張感と清々しい気持ちで受けました。

平成18年7月31日、27年間お世話になった日比野病院を去る日がやってきました。残務整理をしていたら日にちは代わり8月1日の午前1時を回っていました。当直の万徳さんがやさしく声をかけてくださり玄関で送ってくださいました。

日比野弘道先生が亡くなられ無我夢中の約3年間を乗り越える事が出来たのは10割の皆さんの協力のお陰と、心から感謝しております。

退職をして数年後、戸澤総婦長と街中でばったり、退職者集いの会の発足を計画、毎年春分の日を開催日と決め、弘道先生に黙祷を捧げ、お食事をしながら思い出話にふけり、会員の仲間との悲しいお別れもありましたが、互いに元気であることを確かめ合っております。

令和2年は第10回目の会の開催となります。そろそろ皆さんのご意見を聞いて終わりにしようかなと考えているところです。

取留めもなく綴ってしまいましたが、高血圧症・高脂血症の病名を持つ日比野病院の一患者として今後もお世話になりますので何卒宜しくお願いいたします。

この度は投稿の機会を与えていただき本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

開院40周年を振り返って

元診療技術部長 新居田 茂充



開院40周年おめでとうございます。

初代院長の日比野弘道先生から「地域に信頼され愛される病院を作るためにはどうしてもリハビリテーションが必要だ」と熱い言葉で誘われ、昭和58年に初めての理学療法士としてお世話になりました。

翌59年3月、運動療法施設基準を取得し、4月には2人目の理学療法士が入職。その後、作業療法と言語聴覚療法の施設基準も取得しました。

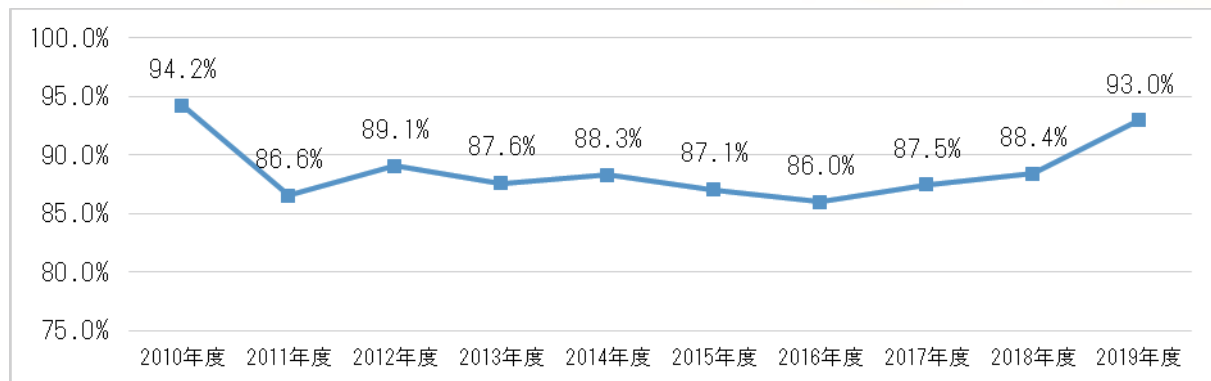
平成18年「回復期リハビリテーション病棟」を開設し、療法士が一気に増えました。更に平成19年に入職されたりハビリ専門医の濱先生がスタッフに与えた影響は大きく、回復期リハビリテーション病棟は日比野病院が誇るもののできる一つの顔となりました。

また平成26年には「地域包括ケア病床」を開設し、リハビリスタッフが病棟に専属配置となりました。

平成29年には沖本科長が新リーダーとなり、療法士47名の大所帯となったリハビリテーション科は新たな目標に向かって進んでいます。

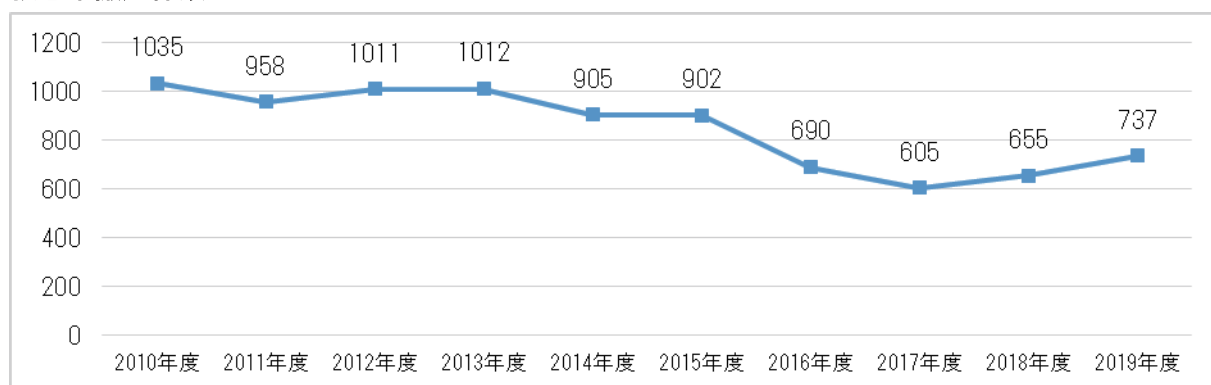
直近10年間の主要診療実績

病床利用率



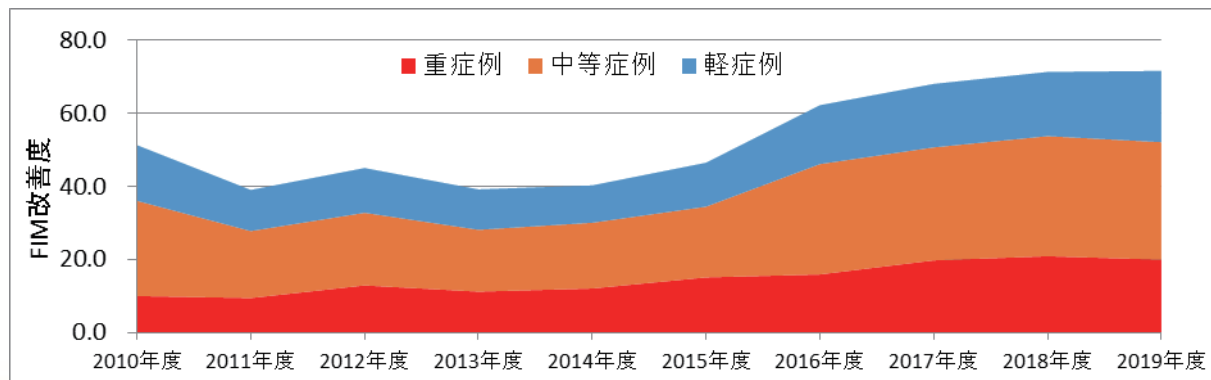
病床利用率は近年80%台後半で推移してきましたが、2019年度は高度急性期病院との連携強化、地域救急・近隣の開業医からの積極的応需により93%に向上しました。

救急車搬送件数



当院は救急指定病院として、脳疾患を中心に24時間365日で救急を受け入れています。救急搬送件数は近年減少傾向にありましたが、地域救急への積極的応需方針により、直近2年間は増加基調となっています。

回復期リハビリテーション病棟における重症度ごとのFIM（機能的自立評価）改善度の推移



入棟患者に占める重症度は重症・中等症の割合が漸増傾向にありますが、FIMの改善度は重症から中等症・軽症に至るまで向上しています。

各 部 署 紹 介
社 会 貢 献 活 動

診 療 部



昭和54年発足当時の診療は日比野弘道先生一人であり、間も無く米澤学先生(のち開業)、次いで小林益樹先生、平成の時代になり金澤潤一先生、日比野誠一郎先生と、脳神経外科の医師が集まり今日の礎が出来ました。平成15年日比野弘道先生の逝去後は、濱聖司先生、佐藤斉先生、忽那宗徳先生と脳神経外科医の層が増し、また齊藤真吾先生、築家直樹先生が加わることで内科管理にも幅が出てきました。令和の時代となり木矢克造先生が加わりました。魚住徹先生には、顧問として当院を見守ってもらっています。その他、広島大学脳神経外科学教室から多数の医師派遣をしてもらってきました。

現在、濱先生はニューロリハビリテーションのリーダーであり、柳川亜紀子先生と共にリハビリテーション機能の充実を図っているところです。災害対応は小林先生、院内感染症対策は金澤先生、医療安全管理は忽那先生、栄養管理は佐藤先生と担当が振り分けられ、非常勤の三原千恵先生は栄養管理の指導役です。

脳疾患を主体とした高齢者疾患の管理、リハビリテーションの充実、地域救急など、今後とも地域の医療ニーズに対応した医療提供を行っていききたいと思います。

スタッフ紹介

医 師

顧 問 魚住 徹

理事長 日比野誠一郎

院 長 木矢 克造

院長補佐 小林 益樹

副院長 金澤 潤一

脳神経外科部長
佐藤 斉

脳神経外科部長
忽那 宗徳

内 科 齊藤 真悟

内 科 築家 直樹

ニューロリハビリテーション科
部 長 濱 聖司

ニューロリハビリテーション科
柳川亜紀子

看護部長室



スタッフ紹介

看護師

部長 吉見 幸美

事務

顧問 仕立 剛

歯科衛生士



看護部理念

「信頼と愛情のもとに 患者様に寄り添える 看護の提供を目指します」

看護部基本方針

1. 患者を理解し、その人らしい生活を支える
2. 健康回復、及び社会復帰への援助を行う
3. チームの一員として多職種と連携し、患者の生活の質を向上させる
4. 常に自己研鑽に努め、知識技術の向上に努力する

私が看護部長に就任し3年が経ちました。日比野病院は脳外科の単科の病院から始まり40年の歴史があり、先輩方が築いてこられた看護部をより活気あるものにしたいと日々努力しています。看護職員は122名で外来を含め4単位でそれぞれが日々、患者様に喜んでもらえる看護を目指しケアを行っています。脳疾患で、日常生活が不自由になってしまう患者様が多く、身体的ケア、精神的ケアが必要で、在宅へ向けてのケアも重要になってきます。患者様・ご家族と一緒に多職種と連携し、残された機能を使って生活できるように、地域の医療スタッフとのつながりも密にし、安心して在宅へ戻っていかれる看護の提供をしていきたいと思っています。信愛会の名のもと、信頼と愛情をもって患者様に寄り添っていきます。

看護部（外来）

スタッフ紹介

看護師

副部長



主 任



主 任



当院の外来は、日比野病院の理念でもあります「地域に信頼され、愛される病院」として近隣の開業医、施設からご紹介いただいた患者様、地域のかかりつけの患者様の診察、検査、治療を行っています。高齢化に伴い来院される患者様全てに対し、安全で安楽に、安心して検査、治療が行われるように知識を高め満足 of いく看護が提供できるように日々努力しています。

現在、診療科は脳神経外科、脳神経内科、循環器科、内科、消化器内科、呼吸器内科、脊椎・脊髄外来、てんかん外来、脳ドックを16名の医師で行っています。当院は救急指定病院として、24時間患者様を受け入れています。

平成19年内視鏡導入にてGIF、CFが可能となりました。平成28年電子カルテシステム導入となり、訪問看護師との電子カルテ内での情報交換で在宅での患者様や家族の様子の把握がスムーズとなり、異常の早期発見、早期受診につながり、外来においては受診時の指導内容、処方変更などを伝えることにより、お互いに情報共有のツールとして役立てています。平成29年から訪問診療を始め、受診が困難な患者様に対応を行っています。今後も近隣開業医、施設と連携し、地域住民に寄り添い満足の頂ける医療、看護、ケアを行っていききたいと思います。

看護部 (1病棟)

昭和54年に日比野病院が開設され平成12年に「医療法人信愛会 日比野病院」として新しくスタートしました。平成13年には医療法改正が行われ、1病棟は慢性期療

養型病床群を持つ介護療養病棟となりました。そして様々な医療情勢の変化とともに平成25年から徐々に医療療養病床へと変わり平成31年4月には全病床が医療療養病床になりました。

1病棟の患者数は42名で平均年齢は76.3歳と高齢でほとんどの患者さんが寝たきりで日常生活の援助や医療処置を必要としています。スタッフは看護師21名、介護スタッフ11名で、食事や排泄ケア、吸引、入浴介助等あらゆる生活のケアを行っています。患者さんの多くは医療処置が必要な状態で自宅退院が困難な状況ですが、ご家族が毎日面会に来られ熱心に手や足を動かしてマッサージやリハビリをしたり優しく声をかけながら爪切りや口腔ケアをおこなっておられる姿を目の当たりにすると、私達も「看護の原点」とは何かを考えさせられることがあります。本院が40周年を迎えるにあたり、当初の病院理念「限りない信頼と深い愛情」を念頭に置き、私達スタッフ1人1人が患者様・ご家族と信頼関係を築きながら心のこもったケアが提供できるよう努力したいと思います。

スタッフ紹介

看護師

師長

主任

主任

介護福祉士

主任

介護士

看護学生（介護士）

清 掃

看護部（2病棟）

二病棟は一般病床38床、地域包括ケア病床13床で、救急入院の受け入れを中心としつつ、在宅療養や施設で調子が悪くなった人や介護者休息のための入院にも応需しています。

平成12年4月に新館が完成した際に、一般病床164床から一般病床50床、療養病床97床のケアミックス型に変更となり、平成21年3月に現在の一般病床51床になりました。

平成26年10月から51床のうち9床を地域包括ケア病床に転換し、平成27年11月に13床に増床しました。

急性期といっても高齢者が多く、認知症の患者さんも増えつつあります。大病院ではなく、二次救急病院としての役割を考えながら患者さんやその家族に寄り添った看護をしていきたいと思っています。

スタッフ紹介

看護師

師長

主任

主任

介護福祉士

主任

介護士

清 掃

看護部（3病棟）

スタッフ紹介

看護師

師長

主任

主任

介護福祉士

主任

介護士

清 掃

三病棟は回復期リハビリテーション病棟として脳疾患、脊髄損傷、神経疾患等に対して、ニューロリハビリテーションを集中的に行う病棟です。

回復期リハビリテーション病棟は平成18年5月に医療療養病床50床を転換することにより

開設されました。その後、平成21年3月に病床再編により49床となり、平成28年12月に1室4床増床し53床になりました。

三病棟では、日常生活向上の援助、介護負担の軽減のため、家族指導を行い、退院後の生活を見据えた看護を行っています。経管栄養、気管切開の患者様も受け入れ、経口摂取に移行できるように、摂食嚥下チームを中心に取り組んでいます。

今後も、医療度、介護度の高い患者様、いろいろな不安や問題を抱えておられる患者様の受け入れも増加していくと思われ、多職種との連携を密にして患者様、ご家族の意向に添え、笑顔で退院して頂けるよう精進していきたいと思いをします。

リハビリテーション科

リハビリテーション科では、『地域に信頼され、愛される病院を目指し努力します』という信愛会の理念のもと、リハビリスタッフだけでなく、他職

種との連携も図りながら、患者様が住み慣れた地域で、その人らしい生活が送れるよう、リハビリテーションサービスを提供しています。

当院ならではの特色あるサービスとして、身体機能の回復や日常生活の自立に向けた取り組みに加え、近隣の自動車学校と協力して行う自動車運転支援や社会復帰に向けた復職支援も行っています。最近では、地域の耳鼻咽喉科の先生と協力して、嚥下内視鏡検査(VE)を行い、摂食・嚥下機能向上に向けた取り組みも行っています。

地域においては、広島県地域リハビリテーションサポートセンターとして、広島市から委託を受けて、住民の通いの体操の場の立ち上げや、地域ケアマネジメント会議などに参加して、介護予防に関する取り組みも行っています。

今後は訪問リハビリテーションも開始して、在宅復帰後の生活にもアプローチしていく予定です。

その他では、研修や研究にも力を入れており、特に研究は広島大学での産学合同研究事業にスタッフを派遣し、リハビリ技術の向上のために研鑽を積んでいます。

スタッフ紹介

理学療法士

部長

主任

副主任

作業療法士

副科長

副主任

言語聴覚士

アシスタント

薬 剤 科



薬剤科は、入院中の患者さんを対象として現在薬剤師4名で業務にあたっています。

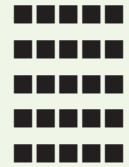
医薬分業が叫ばれるようになって約30年くらいになりますが、当院は比較的早くから、外来処方を院外に出すようになったと聞いています。

薬剤師をめぐる仕事の内容は、時代とともに大きく変化し、特に平成26年に施行された改正薬剤師法では、仕事の内容が一段と増え、チーム医療を担う一員として、責任も格段に大きくなりました。その中で調剤薬局や大病院で働く薬剤師が年々増えているのに対し、当院のような中小病院で働く薬剤師は横ばい、もしくは減少してきているというのが現状です。特に地方都市においてそれが顕著と言われています。高齢化、人口減少などで医療を取り巻く状況は、大きく変わりつつあります。国の打ち出した地域包括ケアシステムの中で、薬剤師の役割が問われているといっても過言ではないと思います。今後も薬の専門家として患者さんに寄り添い、よき医療人であることを心掛けていきたいと思っています。

スタッフ紹介

薬剤師

主 任



事 務



放 射 線 科

スタッフ紹介

放射線技師

主 任



事 務



放射線科は診断・治療に必要な医用画像を提供する部署です。診療放射線技師4名、事務員1名が協力し、業務を行っています。X線CTは昭和54年の開院時、MRIは平成4年に近隣に先駆けて導入し、時代のニーズに合った装置に更新しながら現在に至っています。CT、MRIでは地域医療に貢献するべく安佐南区を中心に他施設からの紹介検査にも力を入れています。その他、X線一般撮影装置、血管撮影装置、骨密度測定装置、超音波装置を用いて検査を行っています。また撮影業務以外にも、3次元構築などの画像処理、画像データの保存・管理、外部への画像データ提供、検査の予約管理、被ばく管理、遠隔画像診断の依頼・管理など業務は多岐にわたります。

放射線科では予防医療の一環として脳ドックも精力的に行っています。インターネットを使用した予約の管理、MRI・超音波を中心とした精密検査、結果の通知など、利用される方に満足していただけるよう他部署と連携しながら取り組んでいます。

臨床検査科

スタッフ紹介

臨床検査技師

主 任



臨床検査には、人体から採取された検査材料(血液・尿・便など)の検査を行う検体検査と患者さんに対して直接検査をする生理検査があります。

当院の検体検査室には、25項目が同時に測定できる生化学自動分析装置・血球計数装置・グルコヘモグロビン分析装置・血液凝固測定装置等、緊急検査に対応できる検査機器があり、迅速で正確な検査結果を提供できるよう努力しています。検査結果が正確に測定されているかどうか、内部精度管理を行うことや、外部の精度管理調査に参加することにより検定しています。2015年からは「精度保証施設認定」を受けています。

生理検査室では、心電図をはじめ、脳波、血圧・脈波検査、肺機能検査、睡眠評価検査、健康診断時の視力・聴力検査、禁煙指導のためのCoモニター等、臨床の要望に沿って幅広い検査を行っています。近年、睡眠時無呼吸症候群への注目が集まる中、近医からの紹介による睡眠評価検査の依頼が増えています。

40周年を迎えるにあたり、品質の高い検査結果を提供すると共に、地域そしてチーム医療に貢献できるよう、努力していきたいと思っています。

栄 養 管 理 科



栄養管理科の主な業務は、管理栄養士による外来・入院患者の栄養指導、入院患者の栄養管理及び、調理師・栄養士による治療食の提供です。

各専門スタッフが、多職種連携の一員として、専門的技術・能力を発揮し、栄養面より治療あるいは病状の回復の促進を図れるよう、治療の一環としての食事作り、栄養管理に努めています。

これから益々高齢化が進む中、当院に入院されている多くの患者も、サルコペニア（加齢や疾患により筋肉量が減少した状態）や、フレイル（加齢による心身が老い衰えた状態）の状態にあります。

そのような中、栄養は、「健康長寿の3本柱：栄養（食・口腔機能）、運動（身体活動・運動など）、社会参加（趣味・ボランティア・就労）」の一つに挙げられ、大切な役目を果たします。

私たち栄養管理科スタッフは、入院時のみならず、在宅にも目を向け、「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう」、シームレスな栄養管理を行い、多くの方のお役に立てるよう努めていきたいと思っております。

スタッフ紹介

管理栄養士

科 長 ■■■■■
■■■■■

栄養士

■■■■■

調理師

副主任 ■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■

調理員

副主任 ■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■

事 務

■■■■■

スタッフ紹介

臨床工学技士



准看護師



臨床工学科の主な業務は、機器管理業務、呼吸治療業務、洗浄滅菌業務、内視鏡業務です。

機器管理業務は、機器を中央管理し、定期的に保守点検を行い現場で安全に使用できるよう努めています。呼吸治療業務は、人工呼吸器が正常に動作しているか、設定が患者様に合っているかなど1日2回使用中点検を行い、月に1回機器の入替をして、点検や校正を行っています。洗浄滅菌業務は、感染などが起こらないよう細心の注意を払って、使用後の器材の洗浄・消毒・滅菌を確実にしています。内視鏡業務は、VE検査時のみカメラの準備をし、使用前・使用後の点検および洗浄・消毒を行っています。

現在の医療は医療機器なしでは成り立ちません。そういった意味で臨床工学科の業務は、医療現場において大元の部分であると思います。そのため、今後も可能な限り機器に関するトラブルが起きないように、またトラブルが起きた時には迅速に対応するように心がけて業務にあたるとともに、現場スタッフの負担軽減につながるよう側面からのサポートを行っていきたいと思っています。

地域連携室・患者支援相談室

スタッフ紹介

看護師

副部長

社会福祉士

主 任



地域連携室

2005年(平成17年)地域医療連携室を開設。2015年(平成27年)地域連携の強化を図るため、高度急性期からの入院相談や地域の先生方が相談しやすい地域連携室として窓口を一本化しました。

地域との顔の見える関係づくりとして、年一回地域の先生方、施設の皆さんとの交流会、年二回、地域のケアマネさんと交流会を行っています。

転院前に訪問面談を行い、患者様の状態を把握したうえで、転院時の送迎の手配をすることにより、スムーズな入院ができています。

日比野病院は4つの機能を持ったケアミックス型の病院です。

機能を十分活かした受入れができるよう、顔の見える連携から信頼される連携を目標にしています。

患者支援相談室

患者支援相談室は2005年に発足。2018年7月～入退院支援部門を設置。現在は医療ソーシャルワーカー4名、看護師1名が在籍しています。一般病床、地域包括ケア病床、回復期リハビリテーション病棟は在宅復帰や施設入所等の退院支援が必要な患者様が多く、退院援助が主な業務となっています。患者様やご家族と面談を行い、医師や看護師、リハビリと連携しながら、今後の療養先を検討し、在宅事業所や施設、病院との連絡調整を行っています。また、身寄りのない方や経済的な支援が必要な方の入院も数年前から増えており、後見人制度等を活用するケースも年間数件程度あります。後見人が決まるまでに時間を要しますが、当院の入院機能を十分に生かし、何とか施設に繋いでいます。

診療情報管理室

スタッフ紹介

診療情報管理士



事務



診療情報管理室は病院内で取り扱っている診療情報を統括する部門です。
平成17年に病院機能評価 Ver5.0を受診するにあたり、診療録をはじめとする診療に関する諸記録の適切な保管管理・点検改善・活用・提供を目指し設立されました。

部署を立ち上げられた橋本由紀子さんは当時を振り返って、「機能評価まで3ヶ月しかないという状況のなか、1人で立ち上げた部署です。当時はまだ診療情報管理室がある病院自体が少なく、診療情報管理って何をするところ？という感じでした。病院内でも知られていなかったので、まずどんなことをする部署なのかを知ってもらうところからでした。」と、話されています。

平成24年度の診療報酬改定で出来高報酬体系の「データ提出加算」が新設され、部署を引き継がれた藤川 大祐さん（現在、医療法人社団誠友会 セントラルクリニック事務長）によって、広島県の出来高算定病院では初めてとなる「データ提出加算」算定病院となりました。「まだまだ電子化が進んでいない病院が多く、当院も紙カルテでの運用でしたが、医師・看護師のみなさんの協力を得たおかげで取り組むことができました。いい経験をさせてもらったと思います。」と当時を懐かしく振り返っておられました。

平成28年の電子カルテ導入ではさまざまな部署と協力しながら病院の中心となって取り組んでいくことができました。

現在、3名体制（うち診療情報管理士2名）となり、カルテの点検業務だけでなく電子化されたさまざまな情報を収集・分析し、各部署や会議に資料を提供しています。近年では医療経営的な視点も求められる部署でもあることから病院経営にも深く関わっていく部署になりつつあります。

事務部



平成12年の病院増築前は外来、受付がオープンカウンターで待合室は患者様で溢れかえり、さらに当時は予約制がなかったので、受付前から行列ができ、毎日、受付番号争奪戦が繰り広げられていました。

病院増築の際に、事務職員の要望で受付とバックヤードを分けていただき、現在の受付を一本化できる体制となりました。

当時数名だった事務職員も現在は40名を超える大所帯になりました。

事務部は外来受付業務、病棟クラーク業務、算定・レセプト請求業務を行う請求事務課と人事業務、経理業務、広報業務、施設管理業務、環境衛生業務、庶務業務、患者送迎業務などを行う人事総務課により幅広い業務を行っています。

事務部のミッションとして、「医療部門を全面的にサポートする」を掲げ、
①医療従事者が診療に専念できるための環境づくり ②診療報酬の引き上げ
③収益を生むコスト管理 ④「集患につながる広報活動」を実施していきます。

スタッフ紹介

総務

部長

課長

請求事務

主任

購買

環境衛生

売店

守衛

運転手

社会貢献活動

●伴地区健康まちづくり講演会の開催

当院では、平成11年から地域住民を対象に健康をテーマとした「文化講演会」を開催してきましたが、令和元年より、地域の皆さんの健康づくりの新たな取り組みとして、伴地区コミュニティ推進協議会・伴学区町内会連合会・伴地区各社会福祉協議会と共催で「伴地区健康まちづくり講演会」を開催しました。



今後は講演会の開催にとどまらず、病院の持つ医療機能やノウハウを生かして地域のみなさんと一緒に「健康まちづくり」に貢献していきたいと考えています。

●健康教室

当院の医師・看護師・メディカルスタッフが講師となり、地域住民を対象に健康維持・病気予防をテーマとした健康教室を定期的に行っています。今後は地域連携室が主体となって、地域の老人クラブや社会福祉協議会の会合に、講師を派遣し、地域のみなさんの介護予防や健康増進に役立てたいと思います。



●日比野病院リハビリ友の会

昭和62年、当院を退院された患者さんから「退院後もリハビリについての意欲を持ち続け、積極的に活動するために、退院者同士が話し合える会を結成してはどうか」との提案を受けて翌63年6月「日比野病院リハビリ友の会」が発足しました。

けっして肩肘張らず、集まれる会として、毎月開催の茶話会や春と秋にはバスハイキングを行い、年4回季節ごとに「リハだより」を発行しています。



●地域連携交流会

地域の開業医の先生方や介護事業所のみなさんと顔の見える関係を築き、連携を強化することを目的とし、毎年「地域連携交流会」を開催しています。

日比野病院の機能の説明、当院医師による講演、職員紹介などの後、懇親会を行い、普段はなかなか直接会って話ができない先生同士や病院と介護施設の交流に役立てています。



●広島大学医学部・歯学部・薬学部合同早期体験実習

医療・保健・福祉関係の施設等で行動を共にする体験を通して、相互協力の重要性和関係分野の理解を深めることを目的に、広島大学から毎年7名の実習生を受け入れています。

医師、歯科医師、看護師、薬剤師、理学療法士等を目指す学生に施設見学や感染予防、看護師のケアの体験など、2日間の実習を通してチーム医療や患者中心の医療の重要性を学んでもらいます。



●伴地区中学生の職場体験実習

毎年、伴地区にある伴中学校、大塚中学校、戸山中学校の学生の職場体験実習を受け入れています。2日間の実習で、病院の設備見学、看護師のケアの体験、リハビリの見学、患者様とのコミュニケーションなど様々な体験をしてもらいます。

実習を通して、働いている人たちの仕事を知り、仕事をすることの重要性を学び、将来の職業選択に役立ててもらうことを期待しています。



写真で見る病院の歩み



昭和54年10月 日比野病院 開院



病院開設メンバー 日比野弘道院長 仕立事務長



開院間もない頃の外来風景



4人体制の整った日比野病院医師団



平成3年9月1日県知事より救急医療の表彰を受ける



平成3年10月 開院10周年記念



平成8年4月 日比野誠一郎先生就任体制



平成4年6月 MRI 導入



平成9年12月 老人保健施設しんあい開設



平成11年10月 開院20周年 魚住徹先生記念講演



平成12年4月 日比野病院新館完成



平成15年3月 日比野弘道先生逝去



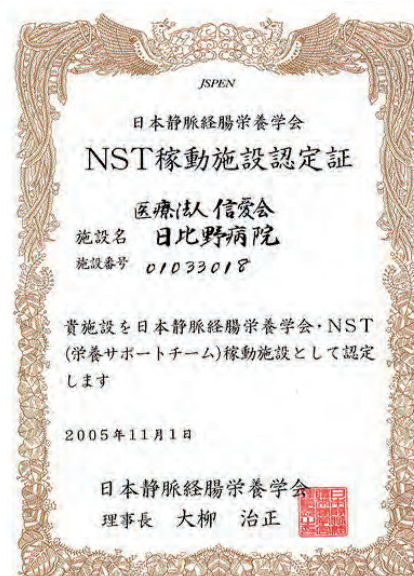
平成15年3月 日比野理事長就任



小林院長就任



平成17年春 本館改修



平成17年11月 NST稼働施設認定

写真で見る病院の歩み



平成18年5月 回復期リハビリテーション病棟開設



平成20年10月 開院30周年記念コンサート



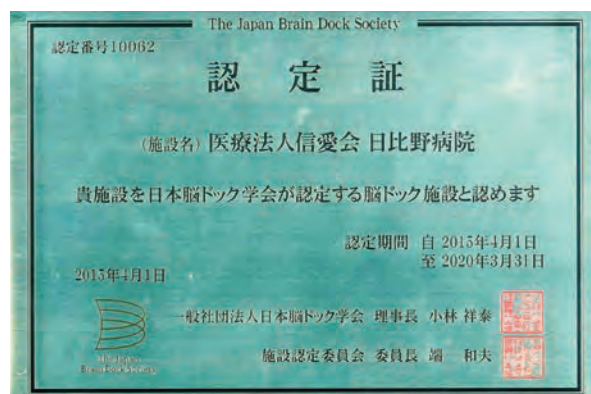
平成21年10月 院内保育施設「日比宅」開設



平成22年10月 医療介護センター開設



平成19年5月 日本リハビリテーション医学会認定



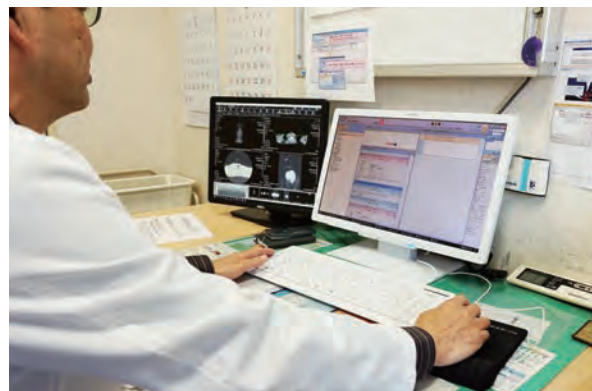
平成22年5月 日本脳ドック学会認定施設に認定



平成24年4月 高齢者用福祉施設めぞん大塚開設



平成27年4月 院内学童保育施設「日比家」開設



平成28年11月 電子カルテ導入



平成29年11月 台湾榮民總醫院 施設見学



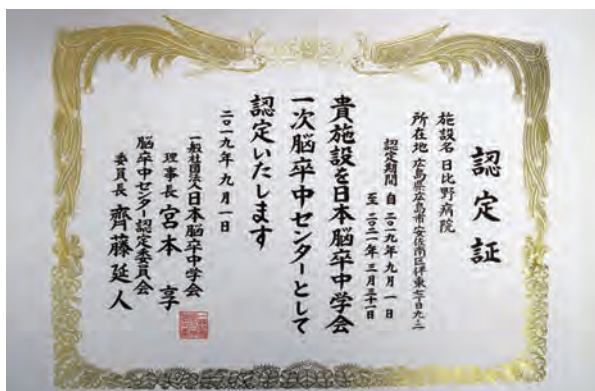
平成30年3月 山陽自動車道沼田PAスマートIC開通



平成31年4月 木矢院長就任



令和元年9月 救急医療功労者知事表彰を受賞



令和元年9月 日本脳卒中学会一次脳卒中センター認定

● 編集後記 ●

令和元年10月1日、日比野病院は開院40周年を迎えました。これまでの40年間の歩みをふり返り、記録に残し、これからの日比野病院の新たな歴史につなげるために40周年記念誌を発刊いたしました。

当院は、昭和54年10月に脳神経外科の専門病院としてスタートした後、介護保険法の施行を受けてケアミックス型病院へと舵を切り、さらに地域包括ケアの流れに呼応して、回復期リハビリテーションを主とした在宅や社会復帰を目指す病院へと政治的、社会的環境の変化に対応し機能を変えてきました。

本誌を通して、開院以来40年の間、地域の皆様に支えられながら今日に至った当院の歩みをご理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、本誌発刊にあたり、寄稿いただきました皆様、作成・編集にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

事務部長 住本 隆

日比野病院開院40周年記念誌

発行：令和2年（2020年）6月

編集・発行：日比野病院
広島市安佐南区伴東七丁目9番2号
TEL（082）848-2357（代表）

印刷：株式会社 有文社

HIBINO
40th

医療法人 信愛会 日比野病院
開院40周年記念誌